忘れられた遺跡発掘(一)

研修部

朝夕の散歩、たまの遠歩きで、ふと出会う石佛や石祠がある。今は法燈も絶えて人々の記憶から遠ざかり、忘れ去られようとしている。辻で悪霊の侵入を防いでくれた道祖神や地蔵尊も、新しくできた道路の傍らに押しやられ、お参りする人もまれになった。

入ると腹がせく薮、さわると脳病みになる石、目やにが出ると母に手を引かれて頂きに行ったお地蔵様のお水など、わたしたちの身の回りにたくさんの不思議があった。楽しみだった賑やかなお祭りも、今は消えるか、味気ないものになってしまった。

とりこわされた屋敷跡にポツンと佇(たたず)む屋敷神の祠や、人々や馬牛たちの飲み水であった出水(でみ)も大半が枯れて草むらになってしてしまった。

人の心のほんとの暖か味は、先祖が残した営みや信仰のなかにあり、私たちは少なくともそれに触ることができた。

だから、私たちの世代限りで消え去ってしまう身近な暮らしや信仰の記憶は、私たちがしっかりと記録して、のちの人々に残す責任がある。

路傍で見付けた石佛、祠や生活の跡、子供のときに経験したさまざまの記憶など、皆に知らせて一緒に調べ、記録していこうではありませんか。

一、宝篋印塔

場所　実相寺三組の二

実相寺山の東麓には、いたる所に五輪塔が散乱している。実相寺山の名のごとく、古刹実相寺が慶長三年の石垣原合戦で焼失するまでこの辺りにあったという。

ここの石塔は、南北に五基が一列に並んでいる。中央の三基は相輪を欠くものの、宝篋印塔の形状を留めいている。鎌倉時代の宝篋印塔は露盤の隅飾突起が直立しているといわれるが、中央の塔の隅飾突起は、まさにその特徴を示している。他の塔も露盤や塔身が太く堂々としている。三基とも南北朝期は下らない古塔と思われる。

曹洞宗実相寺は「豊陽古事談」によれば、天平勝宝三年（七五一）明賢の創建になるとのことであるから、古い宝篋印塔が存在しても不思議ではない。

実相寺は焼失後、天和二年（一六八二）に現在の地に再興され、実相寺山東麓に寺はなくなったが、おびただしい五輪塔は、旧実相寺の境内の大きさを示すものであろう。

いずれにしても、ここの石塔は旧実相寺と関わりの深いものであり、別府市では、最も古い宝篋印塔の一つには違いないであろう。

二、三体の石

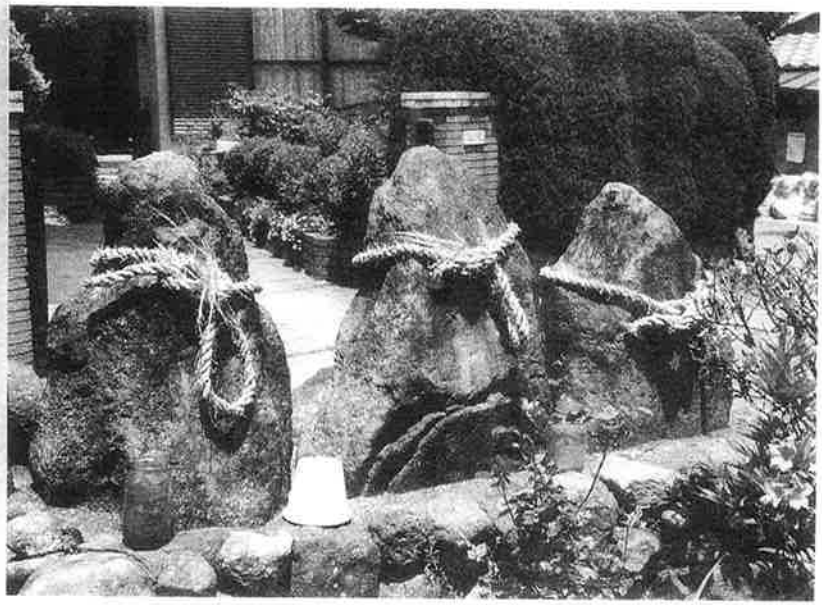
場所　新別府五の一の一

三体の自然石に注連縄（しめなわ）が張られている。三石はほぼ同じ大きさで、南面して等間隔に並べられいてる。

屋敷神として祀られたものであろうか。道祖神として立てられたものであろうか。誰が何時どのような信仰の目的で立てたのであろうか。注連縄が張られているのでどなたかがお祭りしているものと思われる。お祀りしている神様は、また、どんな伝承があるのだろうか。

屋敷神は、屋敷の一遇や屋敷の付属地に祀られている神である。石祠や小さな社に祀ったり、ただの自然石や古木をたよりに祀る場合もある。祭日は、春は旧二月、秋は旧九月と十一月に行なわれる。

道祖神は、村境や辻を守り悪霊の侵入をさえぎる神で



あるが、村境や辻に祀られることから行路を守る神となった。この神の形は、丸石・陰陽石・石像・石祠などがあり、一般にお祭りは正月の十四、五日に行なわれる。

三、石祠

場所　実相寺山西麓

実相寺山と角殿山（かくどのやま）の谷を「犬の馬場」という。この辺り一帯は石垣原の合戦の時、大友軍が攻め込んだといわれる激戦地である。

この「犬の馬場」に面する道路から約五米ばかり登った実相寺山の中腹に、大小二つの石祠がある。背後に大石を背負い、荒い石積みの上に平たい石を箱形に組み立て、平たい一枚石に鈍く尖った石を乗せて屋根にした簡単な作りである。小さい石祠の方はからであるが、大きいほうには石佛が鎮座している。どちらも注連縄があるので、いずれお祭りをしたのであろうが、常日頃お参りしているような気配はない。

石垣原の合戦の戦死者を弔う供養のためにたてられたのか、もっと以前からこの場所に鎮座していた民間信仰の祠か、注連縄があるから神の祠か、神ならば山の神であろうか。

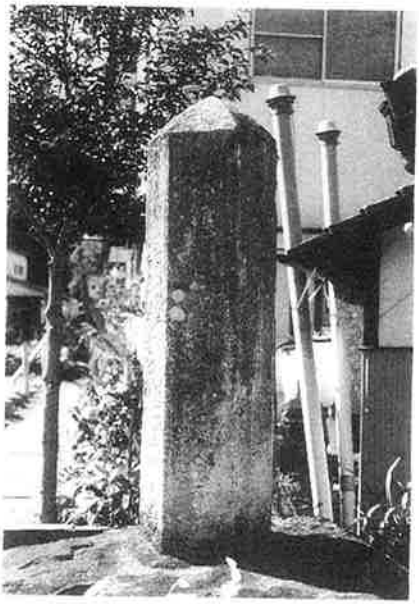
四、石塔

場所　亀川四の湯

観音寺の北、平田川のほとりに六角の石塔がある。この辺りの住宅を壊したら、現われたとのことである。四の湯町二区の自治委員さんの安部忠義氏がこの塔の調査に尽力されている。

塔の正面には「石経　西誉念心拝書」、左側面に「石塔施主　磯井源兵衛則盈・供養施主　備前国磯屋又太郎」右側面に「信行寺住　皆誉任阿和尚」「導師観音寺嗣祖槃岳和尚」と彫られている。

安部氏は、観音寺の西側（裏側）を流れていた平田川が、たびたび氾濫して多くの溺死者を出した。この塔は今のような流路に変える工事を行なったときに建てられ、石に刻んだ経文を納め、溺死者か工事で命を失った者の供養を行なったのであろうと考えられている。建立のいきさつを裏付ける記録はないが、この塔が建てられた正徳三年（一七一三）以前のことである。



五、六地蔵石幢

場所　小倉五の一

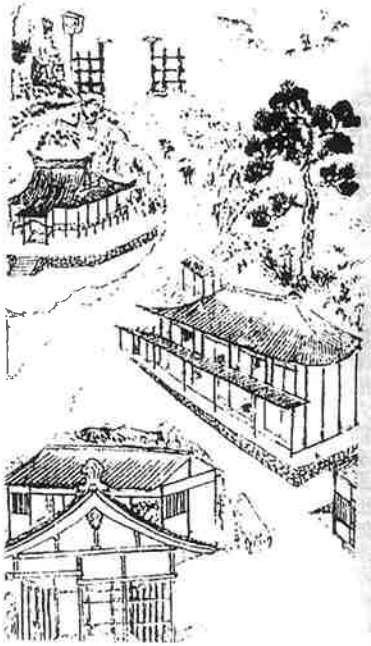
小倉の照湯温泉は、春木川の上流秡川（はらいかわ）の左岸にあり、通称「御前湯」とか「お茶屋の湯」と呼ばれている。

鶴見地区は、慶長六年（一六〇一）玖珠郡森藩

の飛地となった。天保十三年（一八三〇）久留島伊予守通嘉が、この地の庄屋直江雄八郎（伊島重枝）と小倉の有力者佐藤忠右衛門に命じて、浴場、茶屋、庭園を造営させた。現在残る浴槽（照湯温泉）は縦横二、八米の切石で、外周は四、八米で切石や自然石をを敷きつめた構造で、石造りの筧で浴槽に湯を注いでいる。

（昭和四二年四月一一日市指定史蹟）

現在、照湯温泉を尋ねるとゲートボール場西などに切石のすばらしい石垣が残っている。



弘化二年九月、藩主久留島通嘉が直江雄八郎（伊島重枝）に鶴見村にある七湯の由来や村内の名所・旧跡・特産物を紹介する文を書かせ、絵師江川吉貞に絵図を書かせた。これを「鶴見七湯廼記」という。この照湯温泉を描いた中に、松の大木の下に石幢が書かれている。

この六地蔵の石幢はこの絵のものと思われる。根元にある板碑とともに今後の調査が待たれる。